

PRAEVIDENTIA DAILY (1月15日)

昨日までの世界：ようやくトレンド回帰

昨日は、米雇用統計後の調整がようやく一服し、多くの主要通貨で昨年末までのトレンドに回帰したかたちとなり、ドルが対円、対豪ドルで上昇した一方、ポンドやユーロが対ドルで上昇した。ドル/円相場は、東京時間朝方発表の11月経常収支が-5,928億円と市場予想を上回る赤字となり、1985年以降で最大の赤字となったこともあってドル/円の自律反発の一助となった。その後NY時間にかけて103円台後半へじり高となった後、米12月小売売上高が市場予想を大きく上回り、コア小売売上高(除く自動車・建築資材・ガソリン)が市場予想の+0.3%に対し+0.7%だったことから、ドル/円は米長期債利回りや米株価の持ち直しと共に続伸、104円を回復し(一時104.29円)、月曜の下落分を全て取り戻した。

ポンドも、英CPIが前年比で+2.0%と市場予想を若干下回り、やや上値を抑制される局面があったものの、BoEのインフレ目標値と一致しデフレという訳ではない中で反応は限定的で、むしろ自律反発が継続し対円では早朝の169円割れから171円台を回復、ドル/円と同様に前日の下落分を全て取り戻した。

一方、一部の国では住宅市場の過熱が継続しており、ニュージーランド12月QV住宅価格は前年比で前月の+9.2%から+10.0%へ(RBNZ金融政策決定時の声明文でも毎回懸念が表明されているオークランドでは+15.4%)、カナダでも12月テラネットナショナル銀住宅価格は前年比で前月の+3.4%から+3.8%へ上昇した。カナダでは一部に沈静化の兆しも見られるものの、ニュージーランドでは住宅価格の更なる上昇がRBNZの利上げ期待を高めているようで、昨日のNZドルの強含みの一因になったとみられる。もっとも、RBNZは為替と金利を両睨みで政策運営をしており、NZドルが利上げ期待で上昇するようだと利上げペースを落とし、NZドルが下落基調であれば早期利上げに踏み切るとみられるなど、既にNZドルが歴史的な高水準にある中で、利上げ=NZドル高という単純な動きとはなりにくくなっている。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米日2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	+1.2	+0.04	+0.02	-0.02	+0.09	+0.05	-0.04	+1.1	-3.1	+0.8	-0.6
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独株価
ユーロ/ドル	+0.1	-0.00	+0.02	+0.02	-0.05	-0.00	+0.05	+0.1	+1.1	-0.6	-0.00
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.3	+0.01	+0.03	+0.02	-0.04	+0.01	+0.05	+0.1	+1.1		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
豪ドル/米ドル	-1.0	-0.05	-0.03	+0.02	-0.08	-0.03	+0.05	+1.1	+0.9	+0.2	
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
NZドル/米ドル	+0.1	-0.02	+0.00	+0.02	-0.07	-0.03	+0.05	+1.1	+0.9	+0.2	
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	米株価	原油WTI	CRB	
米ドル/加ドル	+0.8	+0.00	+0.02	+0.02	+0.00	+0.05	+0.04	+1.1	+0.8	+0.2	

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

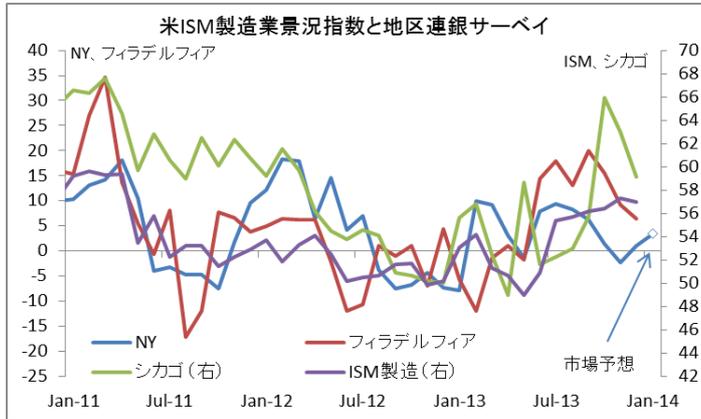
きょうの高慢な偏見：米経済の安否確認を継続

本日の相場材料としては、①Mersch・ECB理事発言(22:05、中立)、②米1月NY連銀製造業景況指数(22:30、前月0.98、市場予想3.50)、③Carney・BoE総裁発言(23:15)、④Evansシカゴ連銀総裁発言(2:50、ハト派、投票権なし)、⑤米地区連銀報告(4:00)、などが予定されている。

ドルを巡っては引き続き、米12月雇用統計の悪化が一時的だったのかを見極める展開が続き、その意味で1月分NY連銀製造業景況指数と米地区連銀報告(ページブック)が注目される。先月発表された12月分地区連銀サーベイはシカゴ分を中心に確かに悪化していたが、NY分は11月の低下から既に持ち直しており、今月分も市場予想通りに更なる改善となればドル下支え要因となり(下図を参照)、ドル/円は105円回復を目指

す展開となろう。

またページブックでは、前回分（11月22日までの情報を基に12月4日に公表）における全体的な景気判断（緩やかなし緩慢/modest to moderate）および12地区連銀の景況感の内訳（ニューヨーク、クリーブランド、リッチモンド、アトランタ、セントルイス、ミネアポリス、ダラスの7連銀が「緩やか/moderate」、フィラデルフィア、シカゴ、カンザスシティ、サンフランシスコの4連銀が「緩慢/modest」、ボストンが「拡大が継続/continued to expand」。違いが分かりにくいですが、moderateの方がmodestより強いとされる）が悪化せず、景気判断が維持されていれば、米雇用統計で示された悪化が一時的との見方を更に強め、ドル回復継続要因となる。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。

プレビデンティア・ストラテジー株式会社

金融商品取引業者（投資助言・代理業）関東財務局長（金商）第2733号

一般社団法人 日本投資顧問業協会 会員番号 012-02641